



2 変動する農村の社会

「現代の地理学」第3週

農村とはどのようなところか (1)

英国スコットランド、イースト・キルブライド

- ・グラスゴー郊外の街にスコットランド農村生活博物館
- ・生産なき観光化された「農村」の展示

新潟県柏崎市高柳町秋ノ島

- ・農家減少、高齢化
- ・観光化が進む「農村」




<http://www.djfweb.co.uk/gallerylanarks.php>
<http://www.jonnobi-takayanagi.jp/stay/oginoshima-stay.html>

農村とはどのようなところか (2)

インドネシア・ピンラン県マロヌン村

- ・スラウェシ島のエビ養殖
- ・養殖業に特化、地元さらに海外まで輸出
- ・島内では「エコシュリンプ」の粗放養殖も
- ・池の使用密度を適正に保ち、生育環境を整えることに努力
- ・エビが病気で死滅するリスクも




輸出用「エコシュリンプ」養殖池
<http://altertrade.jp/archives/6035>

農村とはどのようなところか (3)

愛知県田原市伊良湖町

- ・1960年代以降大規模な土壌改良と圃場整備（耕地の形状を整え営農しやすくすること）
- ・高い専業農家率と大規模経営
- ・耕作放棄地も多い
- ・ハウス栽培が中心のため、資料・燃料など生産費用が多額に上り、外部環境からは切り離されている



喜美農園ウェブサイト
<http://www.miya-g.com/archives/3113947.html>

農村とはどのようなところか (4)

字義

- ・住民が主として農業、あるいは漁業や林業などの第一次産業と呼ばれる活動をなす村として生活している村のこと
- ・村の空間構成 (図2-5)
 - ・周りの自然生態系に働きかけ生活に必要なものを取り出し、農業や林業といった生産活動につなげる。
 - ・そのために必要な田畑・道路・水路などの物的環境を共同で整備してきた。
- ・社会学者は土地に根差した地域共同管理の仕組みを重視
- ・農村地理学者は、人口密度が低く、土地利用が粗放的であり、小さな集落があり、その集落が田畑・草地・森林・水路・道路など周りの場所と強い関係を持ち、人々の暮らしが地元の(自然)環境と調和する、と考えた
- ・しかし、現代の「農村」は多様

農村と都市

都市と農村の分化 (第1章)

- ・歴史的には生産活動は自給的
- ・自給的生产から商業的生产への変化→都市の成長
- ・藤田 (1993) : 都市権力の直接的支配や都市での市場取引を通して、周辺地域の自給自足的な小農耕集落が、食料生産機能を持たない都市の食料供給地として「農村化」されていく (図2-6)

三つの農業革命と農業の産業化 (1)

第一次農業革命 (表2-1参照、以下同様)

- ・一万年前以前から始まる (今世紀まで継続)
- ・土地に根差した農村社会、伝統的な村
- ・定住
- ・定住を可能にする食料確保のための農業生産
- ・野生動物の栽培化、家畜化 (狩猟・採取生活でない)
- ・農地利用のための土地の改変
- ・水や土地といった資源の分布に規定された立地 (図2-5)

7

三つの農業革命と農業の産業化 (2)

第二次農業革命

- ・1630年ごろから現在
- ・自給的な農業から商業的な農業へ変化 (市場を通して金銭的利益を目的)
- ・三圃式農業から輪作式農業へ
 - ・冬穀、夏穀、休耕 (放牧) の3年周期を、冬穀、根菜、夏穀、マメ科牧草の4年周期に
 - ・休耕地がなくなり生産量増加、さらに牧草で家畜飼育が可能に
- ・共同経営から個人経営に
- ・産業革命期に人口が増加し、食料需要拡大
- ・結果として、商業主義的農業が拡大

8



中世ヨーロッパの荘園の様子
<http://manopedia.jp/text/2723>



第二次農業革命後のヨーロッパ農園
<https://seventreesfarm.wordpress.com/2012/04/30/norfolk-four-course/>

9

三つの農業革命と農業の産業化 (3)

第三次農業革命

- ・現代につながる農業の産業化
- ・1928年 (ソ連で計画経済開始) から現在まで
- ・機械化と化学化
- ・技術革新によって農産物の長距離輸送と長期保存が可能に
- ・食品産業とアグリビジネス (第4章) が成長 = 食料生産の工業化

10

農業の産業化による影響 (1)

集約化・集中化・専門化

- ・新しい生産技術によって単位 (面積や就業者) 当たりの生産性増大
- ・農家・産地間で競争が起こり、大型化した単位 (農家や産地) に生産が集中
- ・生産活動が専門化し、特定産物生産に特化したモノカルチャー化が進展

農業地域の自然生態系への悪影響

- ・農業による環境破壊、過剰耕作による土壌侵食
- ・自然生態系の復元力の喪失
- ・農業を非持続的、略奪的なものに変える

11

農業の産業化による影響 (2)

個人経営化と競争

- ・大規模化と離農
- ・自然的条件よりも社会的条件 (安価な労働力や都市市場への近接性) の重視
- ・農業投資の魅力低下
- ・農地の分極化
 - ・先進的産地の形成と条件不利地域での農外就労の模索



高知県芸西村のビニルハウス群
<http://www.vill.geiselkochi.jp/b01m00000002.html>

12

都市化の時空間序列

図2-7

- 農村の地域ごとに異なった局面の人口移動
 - 人口流出、人口還流、人口流入
 - 歴史的段階 = 前工業化、工業化、現在
 - 空間的視点 = 都市からの距離
- 前工業化段階
 - 伝統的時代、都市農村間に人口移動なし、地域社会は相互に孤立
- 工業化段階
 - 人口流出 = 労働者の都市移住
 - 人口還流 = 都市中産階級の郊外移住
- 現代の段階
 - 都市の通勤（人口還流）圏の拡大
 - 都市通勤層の流入
 - 都市からの遠隔地で継続的人口流出
 - 広範な地域が都市とのつながり、伝統的地域社会が減少
 - 都市化によって農村地域が分化

13

戦後日本の農業・農村政策 (1)

第二次世界大戦後の農業基本法

- 国土修繕、食料増産
- 1960年代～70年代（高度成長期）に都市人口比率が農村を上回る一経済成長にともなう国内人口移動
- 農業基本法（1961年制定）
- キーワード = 近代化
- 産業としての農業を強くし、農業経営の安定と農村生活の向上を図る = **生産主義**



昭和35年（1960年）頃の動力噴霧器による農業散布
http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h22_h/trend/part1/kanmatsu/zoom/z11.html

14

戦後日本の農業・農村政策 (2)

食料・農業・農村基本法への改正（1999年）

- 農業の多面的機能（ポスト生産主義）
 - 自然環境の保全、資源涵養、災害抑制、景観保全、レクリエーション機会提供、文化伝承
 - 中山間地域（条件不利地域）での農業維持の困難性
- 様々な補助事業→農家所得拡大
 - 高付加価値地域特産品（地域ブランド化された農産物など）の生産
 - 生産から加工・流通・販売までの一括経営
 - 農家民宿・農業体験など農業と観光業の組み合わせ



<http://agri.mine.utsunomiya-u.ac.jp/about/08-03-12.html>
https://www.npo-egao.net/operation/operation7_2.html

15



千早赤坂村の棚田（2009年）
 1999年に日本の棚田百選に選定



16

戦後日本の農業・農村政策 (3)

都市近郊の農産物直売所、生産緑地、観光農園

- 都市住民へのサービス重視

旬の味ほりがね物産センター

- 長野県南安曇郡堀金村（現安曇野市）
- 人口の約半数が農業に従事
- 米（コシヒカリ）、酪農、リンゴなど果樹栽培
- 1996年開設
 - 自家用に野菜の生産を始めた農家の女性たちが、野菜を持ち寄ってプレハブ施設で朝市
 - 農産物加工施設も併設
 - 139人のうち、女性が約90%（2009年）
 - 利用者は周辺に住む勤労者世帯



<http://www.mint-j.com/fm/11/011.html>（2009年閲覧）

17

生産主義からポスト生産主義の状況

- 生産主義の破たん
- ・農業労働時間短縮
 - ・兼業化
 - ・農外就業機会
 - ・余剰労働力を求める製造業の分散
 - ・公共事業の増加
 - ・米の需給バランスの崩れ
- 結果として
- ・都市近郊の混住化
 - ・限界集落の出現



貝塚市内の駅前農地（2014年）

19

過疎化と限界集落

- 1960～70年代：西日本を中心に**挙家離村**
- 1980年代：政府による**減反政策（生産調整）**
- ・過疎化が進んだ中国・四国地方では耕作放棄率が20%近い（2005年）
- 1990年代以降：地域住民の高齢化や集落コミュニティの崩壊が進行
- 限界集落**
- ・人口減少や高齢化が極度に進んだため存続が困難となった集落
 - ・集落人口に占める高齢者（65歳以上）人口＝50%以上

20

島根県出雲市旧佐田町の限界集落（1）

農村開発企画委員会『平成17年度限界集落における集落機能の実態等に関する調査報告書』2006年より

A地区：出雲市まで片道30分で通勤圏であるが、積雪や凍結の時に通勤が厳しい。



写真 A地区A1集落在住の3戸は全て単独世帯。61歳以下は1人。



写真 A地区A2集落は佐田町の縁辺に位置する。急峻で平地が少ない。

21

島根県出雲市旧佐田町の限界集落（2）

B地区：かつては徒歩や自転車で出雲市・湖陵町あたりへ通っていた。地区住民の意識も、佐田町の中で便利の良いところという意識がある。出雲市・湖陵町方面との交流は盛んで、今も8割程度の人は買い物に出ている。雪で不便を感じたこともない。



写真 B地区B1集落。谷筋を切り開いた小規模な水田が広がる。



写真 B地区B4集落は、昭和30年代に入植によって拓かれた。当時の長屋形式の家屋。

22

山口県岩国市錦町の限界集落（1）



- 写真【A1集落③】
- ・写真中央の山腰には、かつて数戸の家があったが、地出により荒廃し、現在はスギや雑木で山林化している。
 - ・山林管理に關しての集落ぐるみの活動は特になく、不在地主の山林荒廃は激しい。

23

山口県岩国市錦町の限界集落（2）



- 写真【A1集落④】
- ・A地区の元小学校で昭和49年に廃校。現在は修繕され、A地区公民館として再生。
 - ・今回の聞き取り調査の会場として利用したが、A1集落の話し合い等は集落内の各家で行われ、この公民館をA1集落独自で利用することはほとんど無い。

24

山口県岩国市錦町の限界集落 (3)



写真【自地区②】
 ・写真【自地区①】の奥側にあたる集落の荒廃した水田。棚田を形成していたが、耕作放棄されて石垣も崩壊し、雑草と雑木で山林化しつつある。
 ・スギ等が植林された林地についても、竹の侵入（写真下）で荒廃しつつある。

25

集落の消滅プロセス

集落衰退期

- ・集落人口の減少
- ・集落の再生を目的とした政策（むらおこし）必要

集落消滅期

- ・人口激減、集落機能喪失
- ・住民への福祉的ケアや集落の存在を記録し後世に伝えていく政策（むらおさめ）必要

26

農村地域の地理学研究

普通の人々の農村像＝都市と対照的で因習的なイメージ

- ・自然・平和・のどか
- ・社会的低開発性や後進性
- ・過剰に問題地域とみなしたり、過度に美化

現在の農村＝土地との関係は間接的・部分的

- ・大きな社会変動を経験
- ・実際に暮らす人たちがどのような問題を抱えているか

27